

玉澤 徳一郎 衆議院議員

ご紹介をいただきました玉澤徳一郎でございます。発言の機会をいただきましてありがとうございます。わたしは先日、日米 2 プラス 2 閣僚会議におきまして合意されました日米安保協議を高く評価し支持するものであります。今後この合意を実施に移すことによりまして、日米安保体制はより強化され極東のみならず広く世界の平和と安定に大きく寄与することを信じてやみません。歴史的に見ましても 1960 年の安保改定に匹敵する意義を有するものであると考えます。QDR におきましては戦略岐路にある大国の選択が、21 世紀の国際安全保障の環境を決定する主要な要素となりうるといたしまして、インド、ロシア、中国をあげております。私はこの 3 国の中で一番懸念と疑念を持たざるを得ないのが中国の存在であると指摘したいと思えます。なぜかといいますならば、他の 2 国は民主国家でありますけれども、中国はいまだに共産党一党独裁の国家であるからであります。毛沢東は「銃口の前から政権が生まれる」という有名な言葉を残しましたが、その言葉通りの主義をつらぬきとおしました。さらに 60 年安保闘争の際におきましては、米帝国主義は日中共同の敵であるといひまして日米離間策を強力に推進をいたしました。私が中国に懸念を持っておりますのは、冷戦後、毛沢東亡き後を継いだ後継者たちが、これらの言葉を一度も打ち消していないという事実であります。かつてソ連が用いた平和共存という言葉も、彼らは一度も使ったことはないしまた認めてもおりません。私はこれらのことから中国の対外戦略の真の意図は、武力を用いて政治目的を達成することにあると疑念を抱いてまいったところであります。たとえば歴史的に見ましても、1950 年代にはインドとの国境紛争を行いましてチベットを併合いたしました。1960 年代にはウラルから東はすべて中国の領土であるとしてソ連に国境紛争を仕掛けまして多いときには年に 5000 回以上も武力衝突を繰り返したのであります。また、1970 年代にはベトナムと戦争を起こしまして西紗群島を占領いたしました。1980 年代には南紗群島を占拠しフィリピン、ブルネイ、マレーシアと対立をしまいいりました。1990 年代には台湾の武力統一を試みようといひまして、今日もなおその意図を捨ててはおりません。また日本に対しましては尖閣列島の領有を主張し、東シナ海のガス田を、一方的に強行開発をしております。QDR におきましては、台頭してきている大国のうち中国は軍事的に米国と競争しており、米国が対抗戦略をとらなければ通常兵器における米国の優位を相殺しかねないと指摘しているのは、まったく正しいことと存じます。日米安保体制の強化は武力でもって覇権を確立しようとする国に対して、これを阻止ないしは抑止することにあると思えます。一方武力覇権を求める中国にとりましては、日米安保体制の強化は自分の進む道を阻む大きな壁として今後これを破壊すべく日米離間策を始め、あらゆる手段を用いて、つまり各種工作を進めてくると思われるのであります。われわれはこうした工作に乗せられないよう、忍耐力と懸命な手段をもって対応し、団結を固めて逆に中国に対して対抗策をとっていくことであると考えます。それは QDR にも述べておりますように、中国をして政治的自由化の道を選択するよう促し、民主化さ

れた平和国家になるよう仕向けていくことにあると思うのであります。私はもうひとつ懸念していることがあるわけでございますけれども、最近の台湾をめぐる問題であります。台湾は自由と平和の体制を確立しておるのでありますけれども、最近中国と国境画策等が進みまして、将来中国に併合されるような事態も予想されるということを迎えております。私どもがこれを認めるならば、かつてこの第 2 次世界大戦の前にヒットラーとチェンバレンがミュンヘンで会談をしまして、妥協したような事態、こういうことが起こることを懸念するわけであります。従いましてわれわれは今後いかなる中国の脅迫にも屈せず、台湾を第 2 のミュンヘンにしてはならないと、こういうことを強調してまいりたいと思うのであります。以上を持ちまして私のスピーチを終わります。